

問題一 次の文章を読んで、後の問い（問一～問六）に答えよ。

教え方が丁寧になり、落ちこぼれに心を配り、教育力をあげる。つまり教え方のスキルの向上に、どの大学も、大学を挙げて取り組んでいる。これを悪いと言ったら教師失格と言われそうである。ア、少なくとも大学の教師は、親切すぎたはいけないのではないかと、かなり反語的ではあるが、真剣に思っている。

義務教育である中学までは、そして高校までの教育では、それは必須の要件であり、大切なことであると私も思う。高校までの教育においても、当然伸びる子を伸ばす努力はなされるべきであり、どんどん伸びて行くこうとする子の頭を押さえつけるような教育は論外である。

しかし、少数の伸びていこうとする子に（a）シヨウジュンを合わせて行われる教育は、高校までのシステムでは相当に無理がある。20人から30人に1人の教師がついて行われる授業では、それに付いて来られない児童のケアが難しいからである。どうしても落ちこぼれの子を作らないような配慮に重心がかかるのはやむを得ない。

1人の突出よりは、全員がゴールを越えることが初等中等教育の基本である。全員に同じテキストを与えて、同じ機会を与える。たとえそのテキストはもう十分にマスターして、もう一段上の段階に進むことが可能でも、学習指導要領が、中学ではここまで、高校ではここまでと細かく（b）キテイして、それ以上の情報の入った教科書を作ってはならないことに、使ってはならないことになっている。みんな横並びの教育であり、できる子にはつまらなく、できない子にはつらい授業がくりかえされる。

それはやむを得ないことであると思うし、それでいいのである。問題は、（1）大学においてそれがほんとうに必要か、というところにある。私は大学においては落ちこぼれ、オーケーだと思っている。大学においては、みんなが落ちこぼれないようにレベルを設定して講義を行うのではなく、たとえ少数でもその分野にほんとうに興味を持てる学生を生み出し、かつ彼らがどんどん自分の（c）サイリヨウでどこまでも知識を得ることができるような体制をこそ構築すべきだと考えるからである。

イ、大学において「落ちこぼれる」という体験をすることは、逆にとても大切なことだと考えるのである。一度も挫折した体験も持たずに、めでたく卒業して、みんなが社会に出てゆく。これって、怖くないかというのが私の正直な気持ち。

社会人になってから、初めて落ちこぼれを経験して、ある意味あともどりの効かない状態で、追い詰められるというのは、精神的にもきわめて危険だ。落ちこぼれ体験は大学時代に持った方がいい、これは私の持論である。

私は大学は理学部に入り、物理学科に進んだ。高校では物理が好きで、数学も微分積分が好き

だった。ニュートンの運動方程式と微積さえあれば、世界のすべては記述できるなどと豪語していた。京都大学には湯川秀樹先生が居られるということだけで、京大の理学部を受けたのである。それ以外は考えなかった。

結構いい点数で入学したはずなのだが、3回生になってあっけなく(2)物理から落ちこぼれてしまった。その原因を、私は三重苦と呼んでいるが、70年大学紛争で大学がロックアウトされ、1年間ほとんど講義もなかったこと、短歌という表現手段に出会い、それにのめり込んで、大学短歌会、同人誌、結社誌に同時に入会し、短歌漬けという生活になってしまったこと、おまけに恋人に出会い、その恋人が歌人であったことから、恋と歌がリンクしてしまい、こうなるとう物理どころではない。落ちこぼれも自然の成り行きであった。

あんなに好きだったはずの微分も、虚数軸のまわりの積分などと、なにやら意味不明の積分をやられる頃になって完全にお手上げ状態となった。当時、大学紛争の影響もあって、留年して5年間在籍するのは少しも珍しいものではなかったが、私も当然のように5年間を理学部で過ごした。大学院の入試にも不合格で、仕方なく就職を決めたのは、5回生の12月。もうすぐ卒業という時期であった。なんとも行き当たりばったりのでたらめな進路選択であるが、それでもなんとか企業の研究所に就職できたのは、折からの景気で、就職戦線が売り手市場であったためである。普通ならもっと悲惨なことになっていただろう。

それでもアカデミアに残る道を断たれて、就職のため東京へ行くときには、ほんとうに都落ちという気分を実感した。挫折感に支配され、晴れて就職などという精神状態ではなく、何の希望もないままの状況であった。

結果論になるが、この落ちこぼれ体験は、私のその後の進路選択に大きな影響をもたらしたと思っている。落ちのびるようになって就職した企業の研究所であったが、そこで偶然のことからバイオという研究をやらされることになり、薬を開発するための基礎研究に(d)ジュウジすることになった。そのなかで初めて研究、学問というもののおもしろさに目覚めたのである。その間の詳細は別に書いてあるので省略するが、ウサイエンスを本格的にやりたくなり、29歳の秋、思い切って企業を辞めたのである。大学に戻って研究者になると決心した。

当時、もちろん結婚はしており、おまけに1歳と3歳の子どもがいた。大学に帰ると言っても給料があるわけではなく、無給の研究者として帰るのである。研究者の世界は、何年間か無給で励めば、そのあとは定職につけるといった保証のまったくない世界である。一般的な判断から言えば、無謀であり、世間知らず、無責任であるというほかはなからう。

しかし当時の私には、そして幸いなことに私の連れ合いにも、それほど悲壮感はなかった。普通なら、そんな新たな生き方は魅力的だけれど、危険すぎると思いとどまる力が働くだろう。もちろん私もその不安を感じていなかったと言えは嘘になるが、研究をやりたいという衝迫

がより強く私を動かしていた。

生来の楽天気質ということもあるのだろうが、なんとかなるさといった開き直りには、いまから考えると、学生時代の落ちこぼれ体験がどこかに影を落としていたのかもしれない。たとえ一時的には落ちこぼれても、それを（e）バンカイする機会はかならずどこかでやってくる。

何か人生の生き方の選択を迫られたとき、エそれほど重大事でなくとも、自分の生活にかかわる、あるいは研究にかかわる選択をする機会が訪れたとき、〈安全なほうをとるか、おもしろいほうをとるか〉、どちらを優先するかは、その人間の生き方にとって、きわめて大きな意味をもつはずである。特に進路選択にかかわる場合は、その後の人生をどうやり過ごすのかに直結する問題である。

私は学生たちに、二つを選択する必要ができてきたときは、取り敢えずは〈おもしろいほう〉から選べと言いつづけている。おもしろいほうから選べば、たいていはうまく行かなくて、別の選択を迫られることになるほうが多い。しかし、それで失敗しても終わりではない。たいていの場合は、選択の変更がやむなしとなったところで、遅すぎるということはない。

しかし、最初から安全なほうを選んだ場合には、それでなにかが変わるという可能性はきわめて低い。常に安全なほう、安全なほうと選び続けていく人生は、Aに思えてしまうのである。これはまあ、気質の問題だから人それぞれでいいのだが、オ、自分の可能性にチャレンジしてみることは、一回しかない「自分だけの人生」を生きるうえで、大きな意味を持っていると、私は個人的に思っている。

（永田和宏『知の体力』より）

問一 傍線部（a）～（e）を漢字にしたとき、そのうちの一字を含むものを次の（①）～（④）の中から、それぞれ一つずつ選べ。その際（a）～（e）は、それぞれ解答番号1～5に対応するものとする。〔解答番号1～5〕

（a）	ショウジュン	（①）	招集	（②）	照合	（③）	召還	（④）	継承
（b）	キテイ	（①）	起動	（②）	既知	（③）	飢餓	（④）	規模
（c）	サイリヨウ	（①）	栽培	（②）	采配	（③）	仲裁	（④）	掲載
（d）	ジュウジ	（①）	追従	（②）	柔和	（③）	縦走	（④）	拡充
（e）	バンカイ	（①）	会得	（②）	介抱	（③）	回覧	（④）	改装

問二 ア オ に入るものとしてもっとも適切なものを、次の（①）～（⑤）の中から、それぞれ一つずつ選べ。その際 ア オ は、それぞれ解答番号6～10に対応するものとする。〔解答番号6～10〕

① あるいは ② いったんは ③ しかし ④ そして ⑤ とにかく

問三 傍線部(1)「大学においてそれがほんとうに必要なか」とあるが「大学」において必要なことについて、筆者は文中でどのようなようにとらえているか。その説明として適切なものには①を、適切でないものには②をそれぞれマークせよ。その際(i)～(iv)は、それぞれ解答番号11～14に対応するものとする。〔解答番号11～14〕

- (i) 1人の突出よりは、全員がゴールを越えることを目指し、そのために全員に同じテキストを与えて、同じ機会を与えること。
- (ii) 「落ちこぼれる」という体験をすることは大切なことではあるが、一度も挫折せず、卒業して社会に出てゆくこと。
- (iii) みんなが落ちこぼれないようにレベルを設定するのではなく、たとえ少数でもその分野にほんとうに興味を持てる学生を生み出すこと。
- (iv) 伸びる者を伸ばす努力は必要であり、より伸びて行こうとする者の頭を押さえつけない教育を行うこと。

問四 傍線部(2)「物理から落ちこぼれてしまった」理由の解釈に関して、筆者の説明と一致するものには①を、一致しないものには②をそれぞれマークせよ。その際(i)～(iv)は、それぞれ解答番号15～18に対応するものとする。〔解答番号15～18〕

- (i) 元々苦手であった微分も、意味不明の積分をやらされる頃になって完全にお手上げ状態となったため。
- (ii) 恋人に出会い、その恋人が歌手であったことから、自身は楽器を演奏することになったため。
- (iii) 短歌にのめり込んで、様々な団体に入会し、短歌漬けの生活になってしまったため。
- (iv) 自身が大学紛争に参加し、加えて大学が閉鎖され、1年間ほとんど講義が実施されなかったため。

問五 空欄 A に入る語句としてもっとも適切なものを次の①～④の中から一つ選べ。〔解答番号19〕

- ① 難解なもの
- ② 不愉快なもの
- ③ 退屈なもの
- ④ 悲痛なもの

問六 次の(i)～(iv)の文章を読み、筆者が述べている「落ちこぼれ体験がその後の進路選択に大きな影響をもたらした」とことと一致するものには①を、一致しないものには②をそれぞれマークせよ。その際(i)～(iv)は、それぞれ解答番号20～23に対応するものとする。〔解答番号20～23〕

(i) 研究者の世界は、何年間か無給で励めば、そのあとは定職につけるといった保証があり、研究をやりたいという衝動がより強く私を動かしていた。

(ii) 退職して研究者になることへの不安はあったが、生来の楽天気質ということもあるのだろうが、なんとなかなさといった考えを持つことで開き直ることができた。

(iii) サイエンスを本格的にやりたくなり、思い切って企業を辞め、大学に戻って教員になると決心した。

(iv) 留年し、5回生となり、大学院の入試も不合格となったが、折からの景気で5回生の12月にかろうじて企業の研究所に就職することができた。

問題二 次の文章を読んで、後の問い(問一～問六)に答えよ。

心像※はどのようにして獲得されるのでしょうか。どんな心像も生まれつき備わっているわけはありません。生まれたての赤ちゃんが自分を抱いてくれている人がお母さんであると知っているわけでもありません。なんにも知らずに真っ白な心で生まれてきます。じゃあどうしてお母さんがわかるようになるのでしょうか。

知覚を介して新しい経験を受け入れることが出来るからです。

知覚には視覚、聴覚、嗅覚、味覚、体性感覚などがあります。視覚は目から入る情報、聴覚は耳から入る情報、嗅覚は鼻から入る情報、味覚は舌や口腔の奥から入る情報、体性感覚は触覚、痛覚、温度覚、(a)シンドウ覚、関節の動きの感覚(位置覚)など、からだの表面やからだの動きを伝える情報を扱います。昔から五感と言われているのがこれです。仏教では眼耳鼻舌身意げんにびぜつしんいといひます。この最初の五つです。第六感という言葉がありますが、これはこの五つの知覚以外から直接入ってくる情報のことです。

A、、というのを第六感が働いた、などといいますよね。でも、このような知覚が存在するという科学的(b)コンキョコンキョはありません。テレパシーというものもあります。テレは「遠く離れた」、パシーは「感じ」ですから、テレパシーは離れて知覚の届かない距離の出来事を受け取る能力です。固く閉ざしたドアの向こうの出来事を知ることが出来る、などという人がいます。素晴らしい能力です。あつて欲しい能力ですが、残念ながら普通の人間には備わりようのない能力です。

知覚のもっとも重要な働きは(1)対象を区別することです。

視覚を例に考えてみましょう。われわれが自分のまわりにある色々な対象を見ることが出来るのは、それらを色々なもの、アそれぞれ違うものとして区別できるからです。色が少し違っても、明るさが少し違っても、形が少し違っても、その違いに気づくことが出来るからです。

視力検査ではよくランドルトの環というのを使います。

丸が完全に閉じていず、どこかに少し切れ目が入れてあります。その切れ目が見えるかどうかを調べます。環がだんだん小さくなると、切れ目はだんだん見えにくくなります。丸と切れ目ともはや区別できなくなるところが視力の限界です。

色の場合だと、色の明るさを一定にしておいて、色合いだけを少しずつ変えて、その違いが区別できるかどうかを調べます。

この、(2)「違いが分かる」という能力が知覚の基本です。イ、わかるとは「分かる」と書きます。分かるの基礎は区別なのです。

ランドルトの環や色合いの違いはいちばん単純な例ですが、刺激がうんと複雑になっても、原理は同じです。

「絵がわかる」という表現があります。

専門家になると、これは円山応挙の真筆だとか、贋作だとかいいます。応挙と署名があっても、絵全体のまとまり、絵全体の作り出す力が本物の応挙を見つけてきた人から見ると、「違う」のです。作品を区別出来るのです。

味でもそうです。

利き酒の専門家がいます。ワインの世界ではソムリエとか呼んでいます。お酒の微妙な味の違いを区別し、評価出来るひとたちです。何百ものよく似た味を舌で区別出来る人たちです。誰も初めから出来るわけではありません。筆者など、どのお酒も似たような味にしか思えません。似たような味を区別し続けることで、もともと備わっている区別の能力を高めてきたのです。

そこまでゆかなくても、毎日の食事でもわれわれはおいしい、おいしくないと判定しつつ食べています。自分が育ててきたなんらかの基準にしたがって、その時その時の味を区別しています。味わっています。

匂いにも専門家がいます。化粧品会社には香料の微妙な違いを嗅ぎ分ける係がいて、毎日鼻をぴくつかせているそうです。以前、どこかの新聞に、何人もの上半身裸の人が一斉に片方の腕を上げて立っており、これまた何人もの白衣の人たちがその人たちの腋の下にまじめな顔を突っ込んでいる不思議な写真が出ていました。腋臭を消す香料の効果を調べている風景なのです。このひとたちは匂いを細かく区別出来るのです。

知覚の働きの基本はこのように「違いが分かる」ことにあります。この区別の力はもともと備わっているものですが、それだけでは十分ではありません。その働きを(3)より優れたものにするためには、その能力をいつそう鍛えてやる必要があります。絵の鑑定家、利き酒の専門家、香料の専門家などは知覚の区別の能力を(c)キョクゲンまで育ててきたひとたちです。

われわれだって、結構いろんな区別、それも結構複雑な区別の力を育てています。

今、本書を読んで下さっている読者の皆さんは、このページの上にズラズラと並んでいる細か

い、微妙に形の違う、曲がりくねったり、寄り集まったりしている不思議な形を区別しつづけているわけです。

ウ

、これが区別出来なければ、ここに書き並べてあることがらはただの（d）モンヨウにすぎません。日本語を知らない人がこのページを見ても、変な模様のつながりとしかみえないでしょう。筆者がアラビア文字を前にして、いくらこれは文字だと自分に言い聞かせて眺めたところでやっぱり模様にしが見えないのと同じことです。こんなものをどうして区別したり書き分けたり出来るのだろう、と感心してしまうばかりです。

文字が文字として自然に目に入ってくれるのは、似たような形をそれぞれ別の形として区別する力を長年にわたって培ってきたおかげです。考えてもみてください。日本人なら誰でも、ひらがな四六文字、カタカナ四六文字、教育漢字一〇〇六字、英語アルファベット二六文字、アラビア数字一〇文字、合わせて一三四字の形を区別出来るのです。これで最低ですから、実際はもっともっとたくさん小さい小さい形を区別しています。当たり前の能力ですが、決して自然に備わっているわけではありません。苦勞して獲得した能力です。

顔だってそうです。

われわれの顔は目ふたつ、耳ふたつ、鼻ひとつ、口ひとつ、それに加えて髪の毛と髭くらいしか道具立てはありませんが、この単純な形が作り出す微妙な違いを実に細かく区別出来ます。誰だって千人やそこの顔を区別するのはお茶の子さいさいです。

エ

これも訓練が要ります。身近な日本人の顔は区別出来ても、イギリス人の顔はみんな一緒に見えてしまいます。ところが実際にイギリスへ行くと、どの顔も簡単に区別出来ます。しょっちゅう見ているから区別が出来るわけです。

サル顔だって、その気で毎日見ていると、みんな違う顔をしているそうです。羊を飼うひとたちは二〇〇匹や三〇〇匹の羊なら全部顔で覚えているそうです。訓練さえすれば、われわれの知覚はすごい弁別能力を（e）ハッキリします。

オ

心の働きの土台は知覚です。五感を介してさまざまな対象を知覚するわけです。

※心像 心像はメンタル・イメージの訳語。知覚によってその場で生ずるものではなく、意識に現れる像。心像は視覚映像だけではなく、触覚、聴覚、嗅覚、味覚など視覚化できない心理現象を含む。

（山鳥重『「わかる」とはどういうことか』より）

問一 傍線部（a）（e）を漢字にしたとき、そのうちの一字を含むものを次の（①）（④）の中から、それぞれ一つずつ選べ。その際（a）（e）は、それぞれ解答番号24～28に対応するものとする。〔解答番号24～28〕

- | | | | | | | | | | |
|-----|------|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|
| （a） | シンドウ | （①） | 侵入 | （②） | 審判 | （③） | 新聞 | （④） | 振幅 |
| （b） | コンキョ | （①） | 快拳 | （②） | 許諾 | （③） | 距離 | （④） | 拠点 |

- | | | | | |
|-----------|--------|--------|--------|--------|
| (c) キョクゲン | (1) 根源 | (2) 玄関 | (3) 権限 | (4) 威厳 |
| (d) モンヨウ | (1) 仕様 | (2) 要件 | (3) 容態 | (4) 中庸 |
| (e) ハッキ | (1) 待機 | (2) 指揮 | (3) 期限 | (4) 光輝 |

問二

ア く

オ

の中から、それぞれ一つずつ選べ。その際 ア く オ は、それぞれ解答番号 29 ～ 33 に対応するものとする。〔解答番号 29 ～ 33〕

- (1) ただ (2) このように (3) もし (4) すなわち (5) そもそも

問三

傍線部 (1) 「対象を区別すること」について、その内容として適切なものには (1) を、適切でないものには (2) をそれぞれマークせよ。その際 (i) ～ (iv) は、それぞれ解答番号 34 ～ 37 に対応するものとする。〔解答番号 34 ～ 37〕

- (i) 周囲にある様々な対象について、色、明るさ、形などに加え、性別や性格といった違いに気づくことができる。
- (ii) 丸の一部に切れ目があり、大きなものから徐々に小さくなるランドルトの環は、視力検査では切れ目が判別できた環の中で最も小さなものがあるところが視力の限界となる。
- (iii) 色の場合は、色の濃さを一定にし、色の明るさのみを少しずつ変化させ、その違いを区別できる。
- (iv) 味の場合は、例として利き酒の専門家のように、お酒の微妙な味の違いについて何百ものよく似た味を舌で区別・評価できる。

問四

傍線部 (2) 『違いが分かる』についての筆者の解釈について、その内容として適切なものには (1) を、適切でないものには (2) をそれぞれマークせよ。その際 (i) ～ (iv) は、それぞれ解答番号 38 ～ 41 に対応するものとする。〔解答番号 38 ～ 41〕

- (i) 顔は、目、耳がふたつ、鼻、口がひとつ、加えて髪と髭といった構成であるが、この単純な形が創り出す微妙な違いを実に細かくとらえ、身近な人々の顔を千人ほど区別することは簡単である。
- (ii) 文字が文字として目に入ってくるのは、多くの文字の似たような形をそれぞれ別の形として区別する力をもともと備えており、長年をかけてさらに獲得してきたからである。
- (iii) 区別の力はもともと備わっているものであるが、それだけでは十分ではなく、より優れたものにするためには、さらに鍛えていく必要がある。
- (iv) 「違いがわかる」という能力は知覚の基本であり、わかるの基礎は区別することから始まり、得られる刺激がより複雑になっても原理は同じである。

問五

空欄

A

に入る語句としてもっとも適切なものを、次の (1) ～ (5) の中

から一つ選べ。〔解答番号42〕

- (1) キリツとする (2) ホツとする (3) ピンとくる
(4) シャキツとする (5) カツとなる

問六 傍線部(3) 「より優れたものにする」ために必要なこととして、適切なものには(1)を、適切でないものには(2)をそれぞれマークせよ。その際(i)～(iv)は、それぞれ解答番号43～46に対応するものとする。〔解答番号43～46〕

- (i) 毎日の食事でもその都度、味を区別し、おいしい、おいしくないと判定しながら食べているが、自分が生まれつき持っている基準がそれを可能にしていること。
(ii) 専門家になると、これは誰の真筆か贋作かを区別できる。署名があつたとしても、絵全体のまとまりや作り出す力に違いがあり、作品を区別することができる。これは数多くの本物を見つづけてきたことで可能となっていること。
(iii) 何百ものよく似た味を舌で区別出来る人たちは、数多くの似たような味を区別し続けることで、それまでは区別できなかった細かい味の区別も可能になったこと。
(iv) 化粧品会社には、香料の微妙な違いを嗅ぎ分ける係がいて、腋臭を消す香料の効果を調べている。これは何人もの人の腋臭を嗅ぐなど、毎日鼻をびくつかせることで彼らは匂いを細かく区別出来るようになっていていること。

【問題は以上で終わりです。】